Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-29

初期パーソンズ社会学の社会学史的な再解釈 : 比較文明学・トッド人類学を志向して

小川, 晃生

(Citation)
社会学雑誌,33:129-143

(Issue Date)
2017-08-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041386

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041386

初期パーソンズ社会学の社会学史的な再解釈

――比較文明学・トッド人類学を志向して――

小川晃生
神戸大学大学院人文学研究科博士課程

本稿では、パーソンズ社会学とトッド人類学を関係づけるための予備的考察を行う。このような関係づけの目的はルーマン社会学等とは異なる形で社会学理論を発展させることである。現代の社会学理論で重要な役割を担うルーマン社会学およびその継承者はシステムのより精緻な記述を追及する一方で、その方向性での限界を迎えつつある。社会学理論のさらなる発展のためには今こそ方向転換が必要だ。そこで著者が注目したのがエマニュエル・トッドの人類学である。しかし、トッド人類学は新しい「世界像」を提示する一方で社会学理論の観点ではひと昔前のモデルに依拠している。そこで、トッドと同様のひと昔のモデルに依拠しつつ社会学的一般理論の構築を徹底して追及したパーソンズ社会学の「遺産」が今こそ再考されなければならない。しかしパーソンズ社会学を一般均衡理論と見做す表面的な理解のままでは、トッド人類学との接点が見えにくい。そこで本稿では、先行研究を踏まえつつ初期パーソンズ社会学を比較文明学的に再解釈する。ここにおいて、パーソンズ社会学とトッド人類学を比較文明学という共通項で纏めることが可能となるのだ。

一　序論[1]

本稿でなされるのはパーソンズ社会学とトッド人類学との関係づけのための予備的考察である。著者の主要な関心はこのような関係づけを通してルーマン社会学等とは異なる方向性で社会学理論を発展させることである。本題に入る前にこのような著者の関心等について触れておこう。

よく知られているようにルーマン[2]は全体社会の理論としてのパーソンズ社会学を部分的に引き継ぎつつ、シュッツの現象学的社会学、スペンサー・ブラウンの差異概念、オートポイエーシス、回帰的参照、などを取り入れ、ある面ではパーソンズ社会学と比較してより精確な社会システム理

論を彫琢した。そして、このような精緻化の根底にあるのはルーマンにおいて社会システムの基本単位が行為からコミュニケーション・プロセスへと定義しなおされたことである。[3]

しかし、ルーマン社会学にも限界はある。ルーマン自身の指摘によるならばコミュニケーション・プロセスは意識システムとカップリングされており、意識システムから大きく乖離した作動を行えるわけではない（Luhmann 1997＝二〇〇九：九十―一二六）。したがってルーマン的な社会システム理論の精緻化そのものにも制約があるはずである。このような批判は社会学においてはルーマン社会学の系譜に属する今田高俊らの「社会システム学」等にもあてはまる。[4]また、ルーマン社会学においてはコミュニケーション・プロセスの作動が過去の作動を参照したり未来の作動を予期したりすることを通して社会システムは自己を不断に再組織化してゆくとされているが、そのような参照や予期にもまた制約があるはずである。このことから、ルーマンにおける全体社会システム―コミュニケーション・プロセスすべてを包括するシステム―は過剰に推定されたシステムであるようにも思える。[5]

このようにルーマン社会学はパーソンズ社会学を部分的に乗り越える一方で他の部分ではその限界を呈し始めている。このような社会システム理論の停滞のなかで著者が注目しているのがエマニュエル・トッドの人類学である。初期トッド人類学は、家族構造の多様性が生み出す社会の多様性と近代化におけるすべての社会に共通した歴史人口学的変動を組み合わせて、人類の多様性と普遍性を記述した。[6]トッド人類学の研究手法は、社会システム理論の観点から見れば「古風」である。初期トッド人類学において家族構造はそれこそ「物」のように取り扱われている。初期トッド人類学は家族構造の変動さえ考慮に入れていない。しかし、トッド人類学は既存の社会システム理論が提供しえなかった新しい「世界像」を提示している。その例が、トッド人類学におけるファシズム（外婚制共同体家族という共産主義を産出した家族構造と、自由平等主義を産出しうる平等主義核家族構造が基盤）とナチズム（直系家族構造が産出した社会民主主義の「激烈な解釈」）との差異の表現だ。[7]

このようなトッド人類学を社会システム理論に取り入れることで社会システム理論を「前進」させることができる。そしてこの初期トッド人類学を社会システム理論に取り込む際に、ルーマン社会学と比較して「古風」なパーソンズ社会学が今こそ必要とされている。ルーマン的な意味で均衡状態の「もう一つの側」として提示されるパーソンズ社会学の「ぎこちない変動論」[8]は上述したトッド人類学との接続を考えるとき利点になりうる。パーソンズ社会学において均衡状態にある構造を取り出すことは相対的に容易

だからだ。またパーソンズ社会学がルーマン社会学と比べて、ウェーバー社会学とより強いつながりを持つ点もここでは重要である。トッド自身は初期トッド人類学をポスト・ウェーバーモデルとして提示しているから、「ウェーバー社会学からの発展」という共通点で両者を比較することが可能になる。[9] さらに、『文明の接近』という著書の存在が端的に示しているようにトッド人類学には比較文明学的研究としての側面があるが、ルーマン社会学は全体社会システムにおけるコミュニケーションの参照と予期という命題のために比較文明学的アプローチと必ずしも親和的ではない。[10] 比較文明学的アプローチと親和的なのはむしろパーソンズである。[11] しかし、このことは先行研究で強調されてこなかった。パーソンズ社会学の一般均衡理論としての側面を過度に強調する傾向がパーソンズ社会学を比較文明学の枠組みで捉えることを妨げてきたからだ。[12]

本稿ではこれまで記述してきた著者の興味関心を踏まえたうえで、上述したようなパーソンズ社会学における「ぎこちない変動論」について中期パーソンズから『社会的行為の構造』[13]（以後、原題に基づいて*SSA*と表記[14]）へと遡る形で文化システムに関して社会学史的にレビューする。そしてそれに依拠して*SSA*の「読み」を比較文明学的に修正することを通して、パーソンズ社会学を比較文明学の枠組みで捉えなおす。[15] このような作業を通して初期パーソンズ社会学とトッド人類学を比較文明学という共通項で纏めることができるようになり、初期パーソンズ社会学の学術的遺産とトッド人類学を接続することができるようになる。

二　パーソンズ社会学における変動論の一貫性についての再確認

本題に入る前に、パーソンズ社会学における変動論の時代ごとの一貫性について再確認しておく。François Chazelの指摘するダーレンドルフのパーソンズ批判[16]―パーソンズ社会学は社会変動をその視野に入れていないユートピア的なものだという批判―は一九七〇年代以後乗り越えられつつある。社会学史においては、例えば田野崎昭夫（一九七五）は特に*The Social System*（以下、*SS*）以後のパーソンズ社会学における社会変動論について詳細に検討しているし、松岡雅裕（一九九八）はパーソンズ社会学と社会進化論との関係性について詳述している。また松本和良（一九九七）は、パーソンズ社会学が「構造変動を含むシステムの均衡と統合を究明する理論」（松本一九九七：五）であると指摘している。社会学理論においても、例えば大黒正伸（二〇一三）がパーソンズ社会学の一般均衡理論としての側面を相対化する議論を展開している。Chazel（1974＝一九七七）が端的に指摘しているよ

うに、パーソンズにとって変動論は「科学的研究の究極的な対象」(Chazel 1974 = 一九七七：二〇二) なのだ。同様の指摘は小林月子（一九九七）にも見出される。本項では、このような先行研究が存在するにもかかわらず本稿の目的に合わせた形で、パーソンズ社会学の変動論の時代ごとの一貫性を著者自身で追う。一九六〇年代以後のパーソンズ社会学において変動論が大きな役割を果たしているのは自明だ。例えば *Societies: Evolutional and Comparative Perspectives* では段階（原始社会—古代社会…）ごとの社会システムの「進化」が取り扱われているし、*Theories of Society Foundation of Modern Sociological Theory*（以下 *TS*）でも変動論が社会システムにおける「構造変化の問題」として論じられている (Parsons 1961= 一九七八：一一六—一三八)。

議論を一九五〇年代初頭に移す。*SS* の前半部分は制度化概念に依拠したシステム均衡の問題に紙面が費やされており、ダーレンドルフ的パーソンズ社会学の様相を呈している。しかし後半部分では変動論が中心的なテーマとなっており、特にXI章では社会システムの変動の性質について詳細な検討が施されている。また、*Toward a General Theory of Action*（以下、*TGTA*）でも周縁的ではあるが変動論が散在している。例えば、第二部「価値・動機・行為体系」の「まとめ」直前において「社会変動の問題」が一つの項を割いて論じられている点を強調しておく (Parsons & Shils 1951= 一九六〇：三六九—三七四)。

一九四〇年代のパーソンズ社会学についても言及する。変動論への言及という点でもっとも目につく論文に "The Problem of Controlled Institutional Change"（初出は一九四五年）がある。この論文はドイツをいかにして平和的な国家へ変動させてゆくかという問題を扱った戦時色の強いものだが、パーソンズ社会学における制度的変動概念が纏まって表現された論文でもある。そのほかにも変動論を取り扱った論文が散見される。例えば "The Position of Sociological Theory"（初出は一九四七年）においては構造についての知識が変動のダイナミックスを理解する基礎であるということが触れられているし (Parsons 1949b: 11)、"Toward a Common Language for the Area of Social Science"（初出は一九四一年）においても逸脱と変動の関係性について言及されている (Parsons 1949c: 44)。また、西側世界の攻撃性について分析した論文において分析の焦点のひとつとして動態変動の基本プロセスが提示されている (Parsons 1949d: 255, 266-268) ことも指摘しておく。[17]

最後に、*SSA* に言及する。よく知られているように本書はスペンサー社会進化論への言及から議論が始まっており、本書の議論は一貫して社会進化論と深いかかわりを持ち続けている。[18] マーシャル論においてはマーシャル

的実証主義が単線的進化論である原因が論じられている（Parsons 1937: 168= 一九八六：六〇―六一）し、パレート論ではパレートにおける価値システムの複数性と変動の循環性が結びつけられている（Parsons 1937: 275 = 一九八六：二二六）。またデュルケーム論ではデュルケームにおける儀礼のなかでの沸騰概念が循環理論の萌芽として捉えられている（Parsons 1937: 450= 一九八九a：二一〇―二一一）。そしてウェーバー論ではウェーバーにおけるカリスマの転移についての議論がデュルケームの儀礼についての議論と対応関係にあるとされている（Parsons 1937: 676= 一九八九b：五八）。このことと、上述したように本書でデュルケームの儀礼論と循環的変動理論が結びつけられていることを踏まえるならば、本書においてウェーバーにおけるカリスマの転移は循環的変動理論とつながっている。[19] 以上から、パーソンズ社会学において変動論への関心が一貫していることが改めて確認された。このことが以下の議論の前提である。

三　パーソンズ社会学における文化システムの変動論の一貫性について

本項では前項の議論を踏まえたうえで、パーソンズ社会学において文化システムの変動についての言説が一貫して存在していることを確認する。まずこのことに関する先行研究について触れておく。パーソンズにおける文化システムについて詳細な検討を加えた先行研究として初期丸山哲央の一連の研究[20]がある。これらの諸研究は文化システムの変動論について包括的に論じたものではないが、そのなかにはパーソンズ社会学において文化システムの変動論が成立する条件[21]を示唆したものもある（丸山　一九七七：五三）。その他の先行研究として中野秀一郎（一九七五）がある。この研究では文化システムのサブシステムについて詳細な検討が加えられているが、文化システムの変動についての言説に関する言及は乏しい。他方、丸山（一九九一）は *TS* の解説でパーソンズにおける文化システムの変動論について豊富に言及しているが、この論文はあくまで解説である。このように既存の先行研究は著者の観点からすれば十分なものではない。

したがって以上のような先行研究を踏まえつつ、以下ではパーソンズ社会学における文化システムの変動についての言説を著者自身で簡単に追う。一九六〇年代以後のパー

ソンズ社会学において文化システムの変動が豊富に取り扱われているのは自明だ。その一例として*TS*における議論を確認する。[22] 本書では、文化システムは累積的に発展するものとして定義され（Parsons 1961: 981＝一九九一：八一）、そのうえでその発展はヒエラルキーにおける上昇過程を伴った階段状・螺旋状のものとして定義されている（Parsons 1961: 988＝一九九一：一一一）。

議論を再び一九五〇年代初頭に移す。*SS*における文化システムの変動論もまた豊富だ。本書では文化システムは蓄積的に発達しうるとされており（Parsons 1951＝一九七四：一八二、四九二、五四三）、またその変動は単線的なものではないとされている（Parsons 1951＝一九七四：四八二）。本書では文化システムのサブシステムの変動についても詳細に記述されているが、それらはパーソンズ社会学における科学について論じる次項で記述する。他方で*TGTA*での文化システムの変動論についての記述は限定的だ。[23] とはいえ、文化システム変動への言及は確かに存在している（Parsons & Shills 1951: 190＝一九六〇：二〇〇）。

一九四〇年代パーソンズ社会学にも言及する。ここでの文化システム変動論は極めて周縁的である。とはいえ、上述したようにシステム変動論そのものについての記述は豊富だから、文化システム変動についての言説もまた散見される。例えば前項で言及した"Toward a Common Language for the Area of Social Science"では逸脱的行動とシステム変動が結びつけられるなかで文化変動が言及されている（Parsons 1949c: 44）。また、プロパガンダについて分析された論文―〝Propaganda and Social Control〟（初出は一九四二年）―では文化的伝統が持続的変動と間接的に結びつけられている（Parsons 1949e: 279）。このように一九四〇年代まで遡っても、パーソンズ社会学において文化システムの変動論はおおむね一貫して存在している。[24] なお、*SSA*については、第五項で詳述する。

四　パーソンズ社会学における科学の変動に関する記述について

本稿ではこれまで、パーソンズ社会学におけるシステム変動についての議論の一貫性を確認し、文化システム変動への言及も簡単に記述した。それらを踏まえたうえでパーソンズ社会学における科学の変動論についてここでは記述する。なおすでに触れておいたように、パーソンズ社会学において科学は文化システムのサブシステムとして取り扱われている。そのほかに文化システムのサブシステムであると定義されているのは、宗教、哲学、イデオロギー、芸術などである。

*TS*における科学の変動論の要旨を記述する。本書における科学は、同じく文化システムのサブシステムである宗教から哲学とともに分化したシステムとして位置づけられている（Parsons 1961: 992-993 = 一九九一：一二六―一二九）。本書によれば、科学が既述したように階段状・螺旋状に変動するのは再組織化による非連続性を伴っているためである（Parsons 1961: 981-982 = 一九九一：八二―八三）。ところで、本書では文化システムのそれぞれのサブシステムが文化システムの成分によって定義されている。本書の議論を簡単に表現するならば、科学を特徴づけているのは認知的システムの優位性であり、他のサブシステムでは評価的システムや実存的信念のシステム等がより重要な役割を果たしている。そして本書によれば、「文化の下位システムは、それぞれを比較可能とする高度な一般性の水準において、相互に統合されている」（Parsons 1961 = 一九九一：一〇六）のであり、認知的システムと評価的システムは相互依存的に分化し上昇する（Parsons 1961: 986 = 一九九一：一〇三）。これらのことから、本書において科学の変動は文化システム全体の変動と相関関係にあるものとして定義されているといえる。なお、本書では社会科学における問題選択と評価的システムとの関係性が指摘されている（Parsons 1961: 992 = 一九九一：一二七―一二八）点を強調しておく。これらのことから、本書における社会科学の変動はまさに認知的システムと評価的システムの相互依存的変動の表出物となる。

*SS*に議論を移す。本書には文化システムのサブシステムとしての科学、イデオロギー、宗教、哲学などの変動論が豊富に含まれており、[25] *TS*と同様にそれらは認知的システム、評価的システムなどの分析的成分によって表現されている。本書によれば、科学、イデオロギーの変動は単線的なものでないが合理化という方向性を伴っており、そのことに加えてイデオロギーの変動は「科学知識の発達の関数であり、これまで二世代にわたって、社会科学における見解の風土を変えるのに重要な役割を果たしてきている」（Parsons 1951 = 一九七四：五二六）。他方、哲学と宗教の変動は科学と同様に単線的でないが合理化という方向性を伴うとされているが、それに加えて哲学の変動は科学の変動に比べてより大きな抵抗に直面しており社会システムにおける推進力により大きく依存している（Parsons 1951 = 一九七四：三五八―三五九）とされる。

*TS*と同様に、*SS*には変動における科学と文化システムの他のサブシステムとの関係性が記述されている。本書によれば、「科学、応用科学、イデオロギー、哲学、および宗教的信念は、すべてかならず相互に接合しており、いくつかの点でお互いへと徐々に移り変わっている」（Parsons 1951 = 一九七四：三六一）のであり、間接的にではあるが

このことは変動においても適応されることが示唆されている。第一に本書では、科学の変動がイデオロギー、哲学、宗教などの変動のトリガーだと指摘されている（Parsons 1951: 515 = 一九七四：五〇七）。第二に、上述したように本書ではイデオロギーの変動が科学の変動の関数であると指摘されているが、それだけでなく社会科学が科学とイデオロギーの「葛藤の重要な領域」（Parsons 1951 = 一九七四：三五四）であると指摘されている。第三に、本書では哲学による社会科学への「正当性の疑われる『侵入』」（Parsons 1951: 365 = 一九七四：三六一）が指摘されている。第四に、本書では宗教が「経験的な研究関心に好都合な仕方で動態的」（Parsons 1951 = 一九七四：五二六）であるときに科学の発達を促進することが指摘されている。最後に、本書では哲学が「近代科学の洗練さとともかくも比肩できる」（Parsons 1951 = 一九七四：三七二）まで発達したときに、宗教は「中間的シンボリズムの少なくとも大半が消滅」（Parsons 1951 = 一九七四：三七二）するという形で変動しうるとされる。以上からSSの議論に依拠しても科学の変動は文化システム全体の変動と相関関係にあるといえ、また社会科学の変動は認知的システムと評価的システムとの相互依存的変動の表出物として捉えることができる。

五　『社会的行為の構造』再考

第二項で記述したようにパーソンズ社会学には初期であってもシステム変動についての関心・議論は一貫して存在している。そして第三項で指摘したように文化システムの変動論もまた初期パーソンズ社会学において相対的に一貫して存在している。さらに、第四項ではTSおよびSSにおける文化システムのサブシステムとしての科学の変動論ならびに、変動における科学と文化システムの他のサブシステムとの関係性について詳述した。本項でこれらの議論を踏まえたうえで、SSAの再検討を行う。

よく知られているように、本書はイギリス・フランス実証主義の流れを汲む何人かの研究者（パレート・デュルケーム等）とドイツ理想主義を代表する研究者（主にM・ウェーバー）の諸研究に主意主義的行為理論とパーソンズが呼ぶ共通項を見出してゆき、それらの収斂を主張した研究書である。これは科学の変動についての議論である。そしてこれまで論じてきたようにパーソンズ社会学において科学が文化システムのサブシステムとして位置づけられていることを踏まえるならば、本書のテーマは文化システムの変動論にほかならない[26]。既述のように本書に変動論が豊富に含まれていることがこのような「読み」を補強している。

次にTSやSSにおける科学の変動の性質についての記

述を改めて指摘しておく。これらの著書に基づくならば、科学の変動は単線的でないものの合理化という方向性を有している。そして、文化システムのサブシステムである科学・イデオロギー・宗教・哲学はその変動において相関関係にあるのであり、それらの相関的変動のトリガーは科学である。また、社会科学は認知的システムとしての側面と評価的システムとしての側面の両方を併せ持っており、社会科学の変動は両成分の相互依存的変動の表出物である。これらの議論を踏まえるならば、*SSA* で提示された文化システムの変動論としての主意主義的行為理論への収斂は、単に科学の変動だけを表出しているわけではない。それは近代における多様な文化システムのサブシステムの文明学的変動論である。

このような *SSA* の「読み」は、先行研究においても示唆されている。例えば、中野（一九九九）は本書が「近代社会を理解する上でも欠くことのできない古典的著作」（中野　一九九九：一四七）であるとしている。また、油井清光（二〇〇二）は *SSA* が後期パーソンズにおける「近代社会理論の収斂」（油井　二〇〇二：一四七）についての研究の枠組みを提供していることを指摘しているが、このことは本稿における本書の「読み」を補強する。[27] 一九七〇年代パーソンズの宗教的シンボリズムについての小林（一九九七）の研究においても、パーソンズにおける文明学的関心の一貫性が示唆されている。さらに、文化システム概念についての初期パーソンズとソローキンの収斂を論じた大野道邦（二〇一一）からも、本書における文明学的視座を導出できる。[28] M・ウェーバー研究者としてのパーソンズ自身が、ウェーバー社会学とその時代の知的状況との結びつきを強調している点（Parsons 1949f: 69,70-71）に注意を向けてもよいだろう。しかし、本稿のようにパーソンズ社会学における変動論・文化システム変動論・科学変動論の一貫した流れにこのような「読み」を段階的に位置づけることで、*SSA* はパーソンズ社会学に依拠した比較文明学的研究のための経験的素材としてシステム理論の枠組みで現出する。[29]

六　結論―比較文明学という共通性

本稿ではこれまで、中期パーソンズから *SSA* へと遡る形でパーソンズ社会学における文化システムの変動論に関して社会学史的にレビューしてきた。そしてそれに基づいて *SSA* を比較文明学的に読みなおすことを通して、パーソンズ社会学が初期から一貫して比較文明学的研究であったということを小林（一九九七）などの先行研究と比較してより段階的に提示した。今や、パーソンズ社会学とトッド人類学との共通性について語ることが可能となる。両者

はともに初期から一貫して、パーソンズの用語における文化システムのサブシステムについての包括的な変動論を提示した比較文明学研究なのだ。[30] そして序論で指摘したように、例えばルーマン的な意味で変動論が均衡状態の「もう一つの側」として指示されている両者は社会システム理論の観点からみると共にひと世代前のモデルを採用しているといえるから、その関係づけはトッド・ルーマンの収斂を図るよりも容易であるはずだ。[31] このような比較文明学の枠組みに依拠したトッド・パーソンズの収斂・関係づけを通して社会システム理論にトッドの「世界像革命」[32]を導入し、他方では初期を含めたパーソンズ社会学の遺産をトッド人類学と接続することが今後の課題である。

このような関係づけに関してひとつ言及しておく。トッド人類学において文化システムが変動するのは人類学的基底―前近代の家族システムが産出した価値的要素―という「重力」下においてである。[33] これに対してパーソンズ社会学においてそれに寄与しうるのは、合理化という方向性と宗教的価値の社会システムへの制度化である。前者は後期パーソンズのサイバネティクスにおいてより低次であり、後者はより高次である。つまり両者はサイバネティクスにおいて相互補完的なのであり、両者の収斂・関係づけは、先行研究とは異なる形でのサイバネティクスの修正[34]につながる。

註

(1) 本稿の記述のうち、パーソンズ社会学に関する部分は著者の修士論文（小川晃生　二〇一五）に基づく。なお序論の記述は小川（二〇一七）を参照した。

(2) ここでのルーマンについての記述は、Luhmann（1997＝二〇〇九）を参照とした後期ルーマンについてのものである。

(3) ルーマンにおいて社会システムの基盤がコミュニケーション・プロセスであることの重要性を指摘した先行研究に長岡克行（一九九七）がある。

(4) 今田らの「社会システム学」は、システムにおける「逸脱」や「ゆらぎ」等に着目し作動のうえでより「リアル」に社会システムを表現することを目指している。今田高俊、鈴木正仁、黒石晋編（二〇一一）をみよ。ただし、上述した「社会システム学」においても社会システム理論に新しい「世界像」を挿入することの重要性が示唆されている。前掲書六三頁をみよ。

(5) 著者のこのような関心と類似した観点に基づく先行研究として、パーソンズとルーマンにおける国民社会・世界社会の相違について論じた徳安彰（二〇〇四）がある。

(6) Todd（1983＝二〇一一）をみよ。

(7) Todd（1983＝二〇一一：一一六、一五七―一五八、一九四）をみよ。なおトッドの「人類学的基底仮説」は、前近代の家族構造が産出した価値が核家族化した近代以後の社会に影響を及ぼすというもの。

(8) 先行研究における類似した指摘について。佐藤俊樹（二〇一一）はパーソンズ社会学の問題点を鋭く指摘している。それによれば、パーソンズ社会学における構造機能主義は相互行為の挙動

の近似モデルとして成立していない（佐藤　二〇一一：二〇八―二一〇）。構造機能主義全般についての類似の批判は直井優（一九八四）をみよ。なおパーソンズ社会学におけるような「変動する・しない」の差異に依拠した変動論へのルーマン自身による批判については、Luhmann（1980＝二〇一一：二一七―二一九）をみよ。

(9) Todd & Courbage（2007＝二〇〇八）。

(10) ここでの比較文明学的アプローチとは、地域比較アプローチのこと（例えば、現代日本・現代アメリカの比較）。ある対象の歴史的比較アプローチ（例えば、全体社会の18世紀・19世紀の比較）については、ルーマン社会学で取り扱われている。Luhmann（1980＝二〇一一）をみよ。この対比は徳安（二〇〇四）を参照した。また、ある点でこのようなルーマン社会学を応用した後者の意味での比較文明学的研究に今田（二〇〇一）がある。

(11) ルーマンもまた示唆しているように（Luhmann 1997＝二〇〇九：頁不詳）、パーソンズ社会学においてもルーマン的全体社会システムに比較的近い形での「近代社会システム」が想定されている。Parsons（1971＝一九七七）の「まえがき」をみよ。ただし後期ルーマンとは異なり、そのような議論がウェーバー的理念型とより確固として併存していることも確かだ。故に、パーソンズ社会学はルーマン社会学と比べて、ドイツ・アメリカの比較といった意味での比較文明学とより親和的である。なおこのような著者の関心と類似した発想に依拠した先行研究として油井清光（二〇〇六）がある。

(12) パーソンズ社会学の一般均衡理論としての側面を強調する先行研究として遠藤薫（二〇一一）がある。また、パーソンズ社会学が比較文明学の枠組みにおいて明示的に捉えられていないことに関しては、柏岡富英（二〇〇九）をみよ。しかし、パーソンズ社会学を比較文明学と関連づけた先行研究が全く存在しないわけではない。池田誠（二〇〇九）および藤田弘夫（二〇〇二）をみよ。ただし、先行研究における比較文明学的観点でのパーソンズ研究は中期・後期パーソンズ社会学が中心だ。

(13) パーソンズ社会学の時代区分に関しては、高城和義（一九八六）を参照した。

(14) SS4 等の短表記は高城（一九八六）を参照した。

(15) 後期パーソンズ社会学の展開を踏まえたうえで初期パーソンズ社会学を再考することの重要性は先行研究においても指摘されている。例えば小林（一九九七：九八）。

(16) Chazel（1974＝一九七七：二四四―二五五）をみよ。

(17) パーソンズとスペンサーとの関係性については、挟本佳代（二〇〇四）等を参照せよ。

(18) この著書の主要なテーマのひとつがスペンサー社会進化論の超克であったことを改めて指摘しておく。なお、パーソンズにおいて進化論への関心が初期から一貫していること自体は松岡（一九九八：一―二六）でも指摘されている。

(19) 循環的変動理論がパレート、デュルケーム、ウェーバーの三者に共通していることが示唆されている（Parsons 1937: 288＝一九八六：二四六―二四七）点を強調しておく。

(20) 例えば、丸山（一九七七）。

(21) 丸山（一九七七：五三）が示唆したのは、文化システムと社会システムの関係性の変化（制度化のみ→相互浸透）と変動論の成立だ。このことは著者も修士論文で検討した。

(22) 既述のようにすでに丸山（一九九一）が要約し解説している。

(23) 神戸大学の油井清光氏は著者の修士論文口頭試問において、*SS* と *TGTA* におけるこのような相違がパーソンズにおける両著書の位置づけの相違（前者は社会システムの研究書、後者は概説書）に由来しているのではないかと指摘した。この指摘に依拠するならば、*SS* における変動論の豊富さこそがパーソンズ自身の志向をより強く反映しているといえる。

(24) ただし、文化システムの定義が変化していることに注意されたい。よく知られているように、一九五〇年代初頭までのパーソンズ社会学における文化システムは記号システムだったが、一九五〇年代中盤以後では行為システムのサブシステムとして取り扱われている。

(25) 田野崎（一九七五）もまた *SS* におけるこれらの変動論に言及している。ただし、社会変動論として。

(26) *SSA* において、パーソナリティ・社会システム・文化システムの三システムがすでに提示されていること（Parsons 1937 = 一九八九b：一六〇）を強調しておく。ただし、本書の主要な議論にこれらの概念は直接関係していない。

(27) ただし、著者が本稿で示唆しているのは *SSA* における文明の「収斂」ではなくその変動だ。

(28) パーソンズと異なり、ソローキンは比較文明学の先行研究として明白に位置づけられている。柏岡富英（二〇〇九）をみよ。

(29) 小林（一九九七）は初期パーソンズ社会学を文明学的に解釈することの重要性を示唆しているが、それを体系的に提示したわけではない。

(30) 本稿でなされた *SSA* についての再解釈と類似した議論がトッドにおいてなされていることを強調しておく。Todd（1983 = 二〇一一：一六四―一六五）をみよ。

(31) 今田高俊、鈴木正仁、黒石晋編（二〇一一）および濱口恵俊（一九九七）に依拠するならば、ルーマン社会学を「複雑系アプローチ」などと表現できる。序論で指摘したように、このようなルーマン社会学よりもパーソンズ社会学のほうが社会システム理論の観点から見てトッド人類学との乖離が少ない。なお、パーソンズ社会学とルーマン社会学との収斂の重要性を示唆した先行研究として大黒（二〇一三：一四八）があるが、このような収斂はトッド人類学とルーマン社会学との接続につながる。

(32) 日本国内で出版された石崎晴己編（二〇〇一）の題名に由来。

(33) 初期トッドにおいて変動しえないとされているのは家族構造のみであり、その他の社会システムの変動論は家族構造が産出した価値の影響下での、という前提で詳述されている。Todd（1983 = 二〇一一）をみよ。

(34) 今田高俊、鈴木正仁、黒石晋編（二〇一一）では、サイバネティクス修正についての議論が豊富に示唆されている。そのひとつが「逆システム学」（前掲書一八九頁）についての議論だ。

引用文献

Chazel, François, 1974, *La theorie de la société dans l'oeuvre de Talcott Parsons*, Mouton

（= 一九七七、酒井正三郎訳『社会の分析的理論――タルコット・パーソンズの著作における』中部日本教育文化会）

大黒正伸、二〇一三、「パーソンズと機能システム理論の課題――『構造―機能』理論に新しい意味を求めるための覚書」『ソシオロジカ』

三七（一・二）：一二五頁―一五二頁
遠藤薫、二〇一一、〈社会システム論〉再考――歴史変動を理論化する〈社会システム論〉のための覚え書き」『社会システム学をめざして』ミネルヴァ書房　二〇〇頁―二一四頁
藤田弘夫、二〇〇九、「〈書評〉今田高俊著『意味の文明学序説――その先の近代』」『社会学評論』五三（三）：四二三頁―四二五頁
濱口恵俊、一九九七、「文明としての社会システム」伊東俊太郎編『比較文明学を学ぶ人のために』一七二頁―一八八頁
池田誠、二〇〇九、「四大文明のシミュレーション・モデルの研究」『システムダイナミックス』八：六一頁―七六頁
今田高俊、二〇〇一、『意味の文明学的序説――その先の近代』東京大学出版会
今田高俊、鈴木正仁、黒石晋編、二〇一一、『社会システム学をめざして』ミネルヴァ書房
石崎晴己編、二〇〇一、『世界像革命〔家族人類学の起源〕』藤原書店
柏岡富英、二〇〇九、「社会学における比較文明論の系譜」『比較文明』（二五）比較文明学会　九十三頁―一一〇頁
小林月子、一九九七、「宗教的シンボリズムと社会進化」佐藤勉編『コミュニケーションと社会システム――パーソンズ・ハーバーマス・ルーマン』九六頁―一一六頁
Luhmann, Niklas, 1980, *Gesellschaftsstrukutur und Semantik I*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main（＝二〇一一、徳安彰訳『社会構造とゼマンティークⅠ』法政大学出版局）
Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main
（＝二〇〇九、馬場靖雄ほか訳『社会の社会1』法政大学出版局）
丸山哲央、一九七七、「文化体系の諸要素――パーソンズの文化体系論の検討を通して」『金城学院大学論集・社会科学編』一九：二十九頁―五十三頁
――、一九九一、「〔解説〕T・パーソンズの文化システム論」『文化システム論』ミネルヴァ書房　一三三頁―一五八頁
松岡雅裕、一九九八、『パーソンズの社会進化論』恒星社厚生閣
松本和良、一九九七、『パーソンズの社会学理論』恒星社厚生閣
長岡克行、一九九七、「コミュニケーションと行為」佐藤勉編『コミュニケーションと社会システム――パーソンズ・ハーバーマス・ルーマン』二七五頁―二九〇頁
中野秀一郎、一九七五、「〈観念の役割〉論から文化体系論へ」田野崎昭夫編『パーソンズの社会理論』一八八頁―二〇九頁
――、一九九九、『タルコット・パーソンズ――最後の近代主義者』東信堂
直井優、一九八四、「構造―機能主義による説明とテスト可能性」『社会学評論』三五（一）：一九頁―二八頁
小川晃生、二〇一五、「初期・中期パーソンズにおける文化システムの変動論――その一貫性と巨視的視座について」神戸大学大学院修士学位論文　未刊行
――、二〇一七、「パーソンズ社会学・トッド人類学の収斂についての試論――「サイバネティクス」概念を中心にすえて」『第六八回関西社会学会大会報告要旨集2017』二頁
大野道邦、二〇一一、「ソローキンとパーソンズ――『文化システム』概念をめぐって」『京都橘大学　研究紀要』（三八）：一一五頁―一四三頁
Parsons, T., 1937, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory*

with Special Reference to A Group of Recent European Writers, McGraw Hill
（＝一九七六、稲上毅、厚東洋輔訳『社会的行為の構造1』木鐸社）
（＝一九八六、稲上毅、厚東洋輔、溝部明男訳『社会的行為の構造2』木鐸社）
（＝一九八九a、稲上毅、厚東洋輔訳『社会的行為の構造3』木鐸社）
（＝一九七四、稲上毅、厚東洋輔訳『社会的行為の構造4』木鐸社）
（＝一九八九b、稲上毅、厚東洋輔、溝部明男訳『社会的行為の構造5』木鐸社）
————,1949a, The Problem of Controlled Institutional Change in Essays in *Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.310-pp.345
————,1949b, The Position of Sociological Theory in *Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.3-pp.16
————,1949c, Toward A Common Language For The Area Of Social Science in *Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.42-pp.51
————,1949d, Certain Primary Sources And Patterns Of Aggression In The Social Structure Of The Western World in *Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.251-pp.274
————,1949e, Propaganda And Social Control in *Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.275-pp.309
————,1949f, Max Weber 1. The Author and His Career in *Sociological Theory Pure and Applied*, The Free Press, Glencoe, Illinois pp.67-pp.72
————,1951, *The Social System*, The Free Press, Glencoe, Illinois（＝一九七四、佐藤勉訳『社会体系論』青木書店）
————,1966, *Societies: Evolutional and Comparative Perspectives*（＝一九七一、矢沢修次郎訳『社会類型——進化と比較』至誠堂）
————,1971, *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall, Inc.（＝一九七七、井門富二夫訳『近代社会の体系』）
Parsons, T. & Shils, E. A., 1951, Values, Motives, and Systems of Action, in Parsons, T. & Shils, E. A. ed. *Toward a General Theory of Action*, pp47-pp275 Harvard University Press（＝一九六〇、作田啓一、永井道雄、橋本真訳「価値・動機・行為体系」『行為の総合理論をめざして』日本評論社　七五頁—二九一頁）
Parsons, T. & Shils, E. A. & Naegele, K. D. & Pitts, J. R., 1961, *Theories of Society Foundation of Modern Sociological Theory I II*, The Free Press（＝一九七八、倉田和四生訳『社会システム概論』晃洋書房）
（＝一九九一、丸山哲央訳『文化システム論』ミネルヴァ書房）
挟本佳代、二〇〇四、「パーソンズと20世紀の科学」富永健一・徳安彰編『パーソンズ・ルネサンスくの招待——タルコット・パーソンズ生誕百年を記念して』二二五頁—二二三頁
佐藤俊樹、二〇一一『社会学の方法——その歴史と構造』ミネルヴァ書房
高城和義、一九八六、『パーソンズの理論体系』日本評論社
田野崎昭夫、一九七五、「社会体系の変動と歴史分析」田野崎昭夫編『パーソンズの社会理論』二二二頁—二五六頁
Todd, Emmanuel, 1983, *La Troisième Planète*, Éditions du Seuil（＝二〇一一、石崎晴己訳「第三惑星」『世界の多様性——家族構

造と近代性』藤原書店　三二頁―二九四頁
Todd, Emmanuel & Courbage, Youssef, 2007, *Le rendez-vous des civilisations*, La République des Idées
（＝二〇〇八、石崎晴己訳・解説『文明の接近「イスラーム vs 西洋」の虚構』藤原書店）
徳安彰、二〇〇四、「近代の社会構造のシステム論的分析――パーソンズとルーマン」富永健一・徳安彰編『パーソンズ・ルネサンスへの招待――タルコット・パーソンズ生誕百年を記念して』一七五頁―一八八頁
油井清光、二〇〇二、『パーソンズと社会学理論の現在――T・Pと呼ばれた知の領域について』世界思想社
――――、二〇〇六、「比較近代化論とグローカル化論――理論形成論へのエスキス」『社会学評論』五七（一）：一二五頁―一四二頁